

平成 21 年 9 月 11 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18720017

研究課題名（和文） 古典イスラーム・セクシュアリティ思想の現代的意義の研究

研究課題名（英文） A Study of Modern Meaning of Classical Islamic Sexuality

研究代表者

青柳 かおる（AOYAGI KAORU）

東京大学・大学院人文社会系研究科・助教

研究者番号：20422296

研究成果の概要：

ガザリー(1111年没)を中心とする古典時代のイスラームのセクシュアリティ(性行為、生殖、婚姻、女性、ジェンダー、性愛観、生命倫理などのさまざまな性に関する問題)に関する議論を分析し、マッキー(998年没)、イブン・アラビー(1240年没)といったスーフィーと比較した。さらに、カラダーウィー(1926年生)などの現代の思想家の婚姻論とガザリーを比較し、現代における古典時代の受容と影響について考察した。なお、研究成果の拙稿“Transition of Views on Sexuality in Sufism: Al-Makki, al-Ghazali, and Ibn al-'Arabi,” *Annals of Japan Association for Middle East Studies*, 22-1, 2006 は、第一回日本中東学会奨励賞を受賞した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
18年度	1,200,000	0	1,200,000
19年度	1,100,000	0	1,100,000
20年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	300,000	3,600,000

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：宗教学

キーワード：イスラーム

1. 研究開始当初の背景

私はこれまで、『イスラームの世界観』(2005年)において、ガザリー、ラーズィーの神秘思想を中心とする古典思想の博士論文をまとめた。それを踏まえ、さらに現代と結びつく研究へ発展させるために、セクシュアリティの問題を取り上げることにした。

そして『現代に生きるイスラームの婚姻論』(2003年)において、ガザリーの『宗教諸学の再興』における「婚姻作法の書」を翻訳・解説した。この書は、従来のイスラームのセクシュアリティ研究、たとえば、M. Farah, *Marriage and Sexuality in Islam*, 1984; G.H. Bousquet, *L'Ethique sexuelle de l'Islam*, 1990 などにおいては、一部が引用、紹介され

るに留まっていたものである。そこで、「ガザリーの婚姻論」(2005年)および“Al-Ghazali and Marriage from the Viewpoint of Sufism,” 2005において、その書の全体をスーフィズムの視点から分析し、マッキーの婚姻論と比較した。さらに古典スーフィズムにおける性の問題に関する研究は、S. Murata, *The Tao of Islam*, 1992などがあるが、イブン・アラビーが中心であるので、ガザリーに焦点を当て、「ガザリーの修行論における性の問題」(2005年)において、ガザリーの性の議論をイブン・アラビーの女性観とも比較してきた。

本研究では、以上の古典イスラーム研究を踏まえた上で『宗教諸学の再興』以外の著作を用い、さらに多くの古典思想家の見解も取り入れて、古典イスラームの性の議論全体をより包括的に分析する。さらに本研究では、古典研究にとどまらず、現代のセクシュアリティの議論を分析する点が独創的である。現代イスラームのセクシュアリティ、ジェンダー、女性、生命倫理の研究、たとえば、Nawal El Saadawi, *The Hidden Face of Eve*, 1980; L. Ahmed, *Women and Gender in Islam*, 1992; J. E. Brockopp (ed.), *Islamic Ethics of Life*, 2003などでは、古典セクシュアリティ思想の分析や比較はあまりされていない。そこで、本研究では、現代におけるセクシュアリティの議論における古典思想の意義について、文献学的な調査を中心に明らかにする。

ガザリーを中心とする古典から、さらに現代の思想までを視野に入れたイスラーム・セクシュアリティの先行研究は国内外においてほとんどない。古典研究者は、現代までは扱っていないし、現代を専門とする研究者(現代思想研究者および文化人類学者)は、古典の文献まではあまり参照していないのである。こうした状況の中で、広範囲の文献を渉猟し、古典のみならず、現代のムスリム思想家によるセクシュアリティの議論とも比較することは、イスラーム思想研究の新たな分野を切り開くという点で、一定の学術的意義がある。古典と現代のイスラームのセクシュアリティ思想を結びつけた研究はほとんどなく、本研究は、世界的にも最先端の研究といえる。

2. 研究の目的

私の研究の全体構想は、最も重要な古典イスラーム思想家の一人であり、現代のムスリム(イスラーム教徒)にも大きな影響を与えているガザリーの思想、とくにセクシュアリティ(性行為、生殖、婚姻、女性、ジェンダー、性愛観、生命倫理などのさまざまな

性に関する問題)の議論を分析し、現代のムスリムによる性の議論、性に対する考え方と比較することにより、古典思想の現代における影響、意義を考察するものである。

まず文献学的な分析を行い、古典のセクシュアリティ思想を明らかにした上で、現代ムスリムによる文献と比較し、古典思想の現代的意義を明らかにする。次に現地調査を行うことにより、現代のムスリムにおける性の意識や実態について、古典思想の影響を検討する。イスラーム諸国を中心にムスリムにインタビューを行い、ガザリーを中心とする古典思想が、現代のムスリムにおいては、実際にどのように反映されているのかを調査し、現代人における古典思想の影響、相違点、変容について明らかにしたい。

以上の研究構想の中で、本研究は、前半の文献学的な分析に重点を置くものである。現地調査については、将来、全体構想を実現するための予備調査を行うに留める。本研究の目的は以下の二つである。

第一の目的は、ガザリー以外の古典思想家の著作も参照し、古典イスラームのセクシュアリティ思想を明らかにすることである。ガザリーに影響を与えたスーフィー(イスラーム神秘主義者)、マッキー、ガザリーと同じ神学派に属する思想家、ラズイー(1209年没)、さらにガザリーとは傾向の異なる神秘思想家、イブン・アラビーなどの思想と比較することにより、今まであまり知られてこなかったイスラーム固有のセクシュアリティの議論を文献学的に導き出す。その際、ガザリーの代表作『宗教諸学の再興』だけではなく、彼の膨大な著作も渉猟して関連する箇所を分析し、他の思想家についてもさまざまな文献を使用して、セクシュアリティに関する古典イスラーム思想の集大成を完成させる。

第二の目的は、できるだけ多くの現代のムスリム思想家によるセクシュアリティの著作と、先に述べた古典イスラームのセクシュアリティの議論との比較を行い、現代の思想家への古典の議論の影響や、両者の結びつきについて、文献学的な調査をすることである。古典に依拠した思想家から批判的な思想家まで、さまざまな現代の性に関する傾向を網羅し、多様な現代のイスラーム・セクシュアリティ思想を解明したい。

以上のように、文献学的に古典イスラームのセクシュアリティ思想の集大成をまとめ、現代のムスリムの著作と比較し、さらに現地の予備調査を行うことにより、従来、研究の進んでいなかったセクシュアリティに関する古典イスラーム思想の現代的意義について分析する。

3. 研究の方法

2006 年度

ガザリーの代表作『宗教諸学の再興』の他に、ガザリーのさまざまな著作にみられるセクシュアリティに関する記述を渉猟し、読解する。『宗教諸学の再興』では、スーフィーのための倫理や日常生活の送り方が論じられているが、この中の「婚姻作法の書」において、ガザリーは、婚姻生活におけるセクシュアリティの問題に大きな関心を持っており、性交の作法、避妊、性欲など性に関するさまざまな事柄を説明している。またガザリーは、「二つの欲望の撲滅の書」においても性の問題について論じている。ガザリーは、性の力を恐れ、抑制すべきだと考えている一方、性の肯定的な力を認めている。この箇所を分析するだけでなく、ガザリーの膨大な著作も参照することにより、ガザリーの性に関する思想の全体が明らかになると考えられる。

古典イスラームにおける性の議論を検証するためには、ガザリー以外の思想家の文献も分析しなければならない。たとえば、ガザリー以降のイスラーム神秘思想の代表的思想家であるイブン・アラビーを取り上げ、ガザリーの議論と比較したい。イブン・アラビーの代表作は、『メッカ啓示』と『叡智の台座』である。これらを中心に、イブン・アラビーの膨大な著作を分析し、彼のセクシュアリティ、女性観を明らかにする。サッラージュ(988年没) マッキーといったイブン・アラビー以外の重要な古典イスラーム思想家の著作についても、セクシュアリティに関連する該当箇所を翻訳、分析し、ガザリーの性の議論と比較することにより、ガザリーの独自性を検証する。

2007 年度

主に文献学的な分析を行い、ガザリーと彼以外の古典思想家の著作も参照し、古典イスラームのセクシュアリティ思想を明らかにした。具体的には、ガザリーの代表作『宗教諸学の再興』やそのほかの著作の分析を中心とし、ガザリーに影響を与えたスーフィー(イスラーム神秘主義者) マッキーの『心の糧』、ガザリーとは傾向の異なる神秘思想家、イブン・アラビーの『メッカ啓示』『叡智の台座』などに見られる思想と比較することにより、今まであまり知られてこなかったイスラーム固有のセクシュアリティの議論を文献学的に導き出した。

2008 年度

古典文献のみならず、現代の思想家の女性観、性愛観についても分析した。具体的には、現代イスラーム世界に大きな影響力を持つ

法学者のカラダーウィー(1926年生)や、イスラーム原理主義過激派の元祖とされるサイド・クトゥブ(1966年没)の弟、ムハンマド・クトゥブ(1918年生)の著作を参照した。また昨年度のオマーンにおける調査の結果も踏まえ、イスラームにおける婚姻論、女性論を導き出した。

4. 研究成果

2006 年度

古典時代のイスラーム・セクシュアリティ思想の変遷をたどった論文二本を執筆し、そのうち“Transition of Views on Sexuality in Sufism: Al Makki, Ghazali, and Ibn al-‘Arabi,” *Annals of Japan Association for Middle East Studies*, 22-1, 2006 は、第一回日本中東学会奨励賞を受賞した。またドバイとカイロに出張し、アラビア語文献等を収集し、研究成果について宮城学院女子大学キリスト教文化研究所公開研究会で発表した。

2007 年度

引き続き古典時代のセクシュアリティ研究を進め、二本の論文を執筆し、早稲田大学オープン教育センター「ギリシアとアラビアの思想文化への導入」において講演した。また研究成果を取り入れたイスラーム概説書を執筆した。さらに、イスラームの生命倫理に関する事典項目(「イスラーム教の死生観」「イスラーム教の他界観」『応用倫理学事典』丸善)を執筆し、翻訳(「イスラームにおける生命倫理」『生命倫理百科事典』丸善)を行なった。ドイツ、イギリスに出張し、文献収集等を行った。

2008 年度

古典と現代の婚姻論を比較した研究成果について、論文を執筆した。「古典時代と現代におけるイスラームの比較婚姻論」という題目で中東調査会・日本イスラーム協会共催、第11回イスラームとイスラーム諸国「理論と動向研究会」において発表し、女性問題、生命倫理問題を中心に、11世紀のイスラーム思想家ガザリーと現代の法学者、カラダーウィーの議論を比較した。ガザリーの「婚姻作法の書」の妻と子供の位置づけや、妻の条件についても考察を進めた。またオマーンに出張し、現地調査を行った。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

1. 青柳かおる「ガザリーにおける二つの欲望」『駒澤大学佛教学部論集』第39号, 2008年, 494-510頁。(査読無)

2. 青柳かおる「古典時代と現代におけるイスラームの婚姻論比較研究 ガザリーとカラダーウィー」『史潮』第63号, 2008年, 64-81頁。(査読有)

3. 青柳かおる「ガザリーの「婚姻作法の書」にみられる妻と子供」『駒澤大学佛教学部論集』第38号, 2007年, 47-62(490-475)頁。(査読無)

4. 青柳かおる「スーフィズムからみた結婚と性の問題」『多民族社会における宗教と文化』(宮城学院女子大学キリスト教文化研究所)第10号, 2007年, 1-23頁(資料24-33頁)。(査読無)

5.K. AOYAGI, "Spiritual Beings in Fakhr al-Din al-Razi's Cosmology, with Special Reference to His Interpretation of the *Mi'raj*," *Orient: Reports of the Society for Near Eastern Studies in Japan*, 41, 2006, 145-161. (査読有)

6.K. AOYAGI, "Transition of Views on Sexuality in Sufism: Al-Makki, al-Ghazali, and Ibn al-'Arabi," *Annals of Japan Association for Middle East Studies* (『日本中東学会年報』), 22-1, 2006, 1-25. (査読有)

[学会発表](計6件)

1. 青柳かおる「アラビア語概論」早稲田大学理工学術院「入門外国語案内」招聘講師, 於早稲田大学, 2009年7月15日.

2. 青柳かおる「古典時代と現代におけるイスラームの比較婚姻論」中東調査会・日本イスラーム協会共催, 第11回イスラームとイスラーム諸国「理論と動向研究会」於日本記者クラブ大会議室, 2009年1月21日.

3. 青柳かおる「アラビア語概論」早稲田大学理工学術院「入門外国語案内」招聘講師, 於早稲田大学, 2008年7月2日.

4. 青柳かおる「イスラームの婚姻論 ガザリーとイブン・アラビー」早稲田大学オープン教育センター「ギリシアとアラビアの思想文化への導入」招聘講師, 於早稲田大学, 2007年7月23日.

5. 青柳かおる「加藤瑞絵氏: ガザリーのフイクルの修行論に関する考察のコメント」イスラーム国家論研究会11月例会, 於東京大学(本郷), 2006年11月25日.

6. 青柳かおる「スーフィズムからみた結婚と性の問題」宮城学院女子大学キリスト教文化研究所公開研究会, 於宮城学院女子大学, 2006年5月31日.

[図書](計1件)

1. 青柳かおる『面白いほどよくわかるイスラーム 教義・思想から歴史まで, すべてを読み解く』(塩尻和子監修)日本文芸社, 2007年.

[その他]

1. 青柳かおる「イスラーム教の死生観」『応用倫理学事典』丸善, 2008年, 734-735頁.

2. 青柳かおる「イスラーム教の他界観」『応用倫理学事典』丸善, 2008年, 744-745頁.

3. 青柳かおる「読書案内 イスラーム思想史」『歴史と地理』No. 609(世界史の研究213), 山川出版社, 2007年, 45-48頁.

4. 青柳かおる「イスラームにおける生命倫理」(翻訳)『生命倫理百科事典』丸善, 2007年, 第1巻, 57-65頁(Abdul Aziz Sachedina, "Bioethics in Islam," *Encyclopedia of Bioethics*, 3rd ed., New York, 2004).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

青柳かおる (AOYAGI KAORU)
東京大学・大学院人文社会系研究科・助教
研究者番号: 20422296

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者